
七夕物語（雨ふらし風味）。

雨ふらし。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七夕物語（雨ふらし風味）。

【Nコード】

N3493H

【作者名】

雨ふらし。

【あらすじ】

一年に一度、ほんのひとときを過ごすために恋人達は・・・そしてついに・・・

七夕物語（雨ふらし風味） 1

七夕。

大河に阻まれ、年に一度しか逢瀬を許されない二人の、ほんのひとときの甘い時間。

織姫。

彦星。

二人は、一年ぶりの想い人との再会を、静かに見つめ合うことで確かめ合った。

長い長い、無言の見つめ合い。

それは、会いたくとも会えない狂おしいほどの想いに身を焦がした、一年分の愛しき気持ちだが、濃密に、身の内からこぼれだしてくるような沈黙であった。

なんと雄弁な沈黙。

視線を絡ませるだけで、二人の間には、すでに会話が交わされていて

るのだ。

逢いたくて、

逢いたくて、

逢いたくて・・・

ようやく今宵、こうして逢えた・・・

手をのばせば、ほらすぐそこに、あなたが。

いる。

一歩足を踏み出せば、

すうっと、抱擁できる場所に。

いる。

いる、

いる、

いるのだ!!

見つめ合い、まばたきすらしない二人。

小舟で、大河を渡り、岸边に降り立った彦星。

それを迎えた織姫。

すい、

と、やさしいそよ風が、二人の間をすべりぬけていった。

「織姫 エ・・・」

先に声を出したのは、彦星であった。

七夕物語（雨ふらし風味） 2

「彦星・・・」

織姫もまた、ため息のような声で、想い人の名を呼んだ。

そして再び、沈黙。

やさしい風だけが二人の頬をなぶっていく。

どう、声をかけたらよいのか？

どんな言葉がふさわしい？

この1年の月日の中で、胸に秘めた想いのすべてを伝えるには・・・？

わからない、

わからないが、心底相手を想い続けてきたのだ。

それは、わかる。

相手が我を想っていることが伝わってくる。
おそらく、我が相手を想っていることも、同じく伝わっているのだ
ろう。

想いは、ひとつだ。

「いつ・・・、『始め』ようか？」

彦星が尋ねると、織姫は、ふふ、と笑みを浮かべて答えた。

「もう、始まっています・・・」

その言葉を聞き、彦星も、にいい、と唇の端を吊り上げて笑みを浮かべた。

「そうだな・・・もう、始まっている・・・」

つぶやきながら、彦星は歩を進めはじめた。

織姫へ、一直線に、ではなかった。

織姫を中心とした円周上を、反時計周りに、移動し始めたのである。

「なあ、織姫よ。この一年は長かったか？」

移動しながら、彦星が問う。

織姫は、自分の周囲を回る彦星を、静かに見つめながら答える。

「長くもあり、短くもありました」

言いながら、織姫は、移動し続ける彦星を常に正面に見ながら、少しずつ腰を落としていく。

「この日の来るのが待ち遠しくて、長いと思ったり、あなたに会うために、最高の私を準備をするには、短いと感じておりました」

愛おしそうに、目を細める。

それを聞いた彦星も、獰猛な笑みを浮かべた。

「おう、我もそうよ。我も、ぬしに逢う今宵のため、鍛え抜いたぞ」

声が、かすれている。

うれしさ？

怖れ？

いろいろな感情がないまぜになった、いいようのない緊張感で、震えているのだ。

「なあ織姫よ、ぬしは最高よ」

「ほほ、彦星、あなたこそ」

「我はぬしほどの相手に巡り合えた、この生に、感謝しておるぞ」

「ええ、私も気持は同じ」

「気持は同じか」

「そうですとも」

「楽しいなあ・・・」

「本当に・・・」

他愛のない会話を、ぽつぽつと続けながら、次第に彦星の描く円が、小さくなっていく。

二人の間合いが、近づいていく。

接近していくにつれ、周囲の大気が、二人の圧力で、圧縮されていくような感覚。

きりきりきり、と、限界まで緊張感が高まっていく。

そして、

「いくぞ」

「応」

二人の身体が、激しくぶつかり合った。

勝負は、3秒でついた。

七夕物語（雨ふらし風味） 3

彦星が目を開けた時、まず目に入ったのは、織姫の顔だった。

その向こうには、数多の星々が輝く、夜空。

彦星は、織姫に膝枕され、地面に横たわっていたのである。

「・・・・・・・・」

「気がつきましたか」

「今宵、地に伏したは、我か・・・」

彦星は、状況を悟った。

ふたりの身体がぶつかり合った時、何が起こったか、

ものすごい勢いで間合いを詰めていった彦星。

それに対し、織姫は、絶妙のタイミングで、彦星の顔面へ右ストレ

ートを放った。

シンプルで、なんのフェイントもない、まっすぐな攻撃。

それゆえ、必殺の威力と、かわしようのないスピードを備えた究極の一撃であった。

だが恐るべきは彦星、

彼は、紙一重で、そのパンチをかわしたのだ！！

身をひねり、織姫の腕をとらえ、ねじり上げ、さらに信じられぬことには、彼はそのまま彼女を投げた。

究極の『一本背負い』。

そして間髪いれずに、地に倒れた織姫の腕を逆に曲げ、腕ひしぎ逆十字に極めた。

みちつ。

折った！！

・・・やった！？

織姫の右肘を破壊した感触に、彦星は、自分の勝利を感じ、喜びの表情で立ち上がった。

油断。

その瞬間、彦星の背を、冷たいものが駆け上ってきた。

なんと、腕を折られたにもかかわらず、彦星と同時かそれ以上の速さで、織姫も立ち上がってきたのだ！！

「ぬうつ！？」

織姫は骨折したからといって負けを認めたわけでも動けなくなったわけでもなかったそれどころか痛みに耐え強烈な右の回し蹴りを彦星の顔面に放ち彦星はそれを察知し防御しようと脳が両腕に指令を与えたがその反応は間に合わな・・・

ため息の出るほど見事な蹴りが、

彦星の意識を根こそぎ奪っていった。

それは、互いが過ごしたこの1年間、鍛練に鍛練を重ねた1年間の成果全てを、濃縮しつくした3秒間の攻防。

濃密な3秒間だった。

「「私も、つくづく未熟よな・・・」

自らが地に倒れる音を思い出して、彦星は唇を噛んだ。

「紙一重でした」

織姫がつぶやく。

「来年はどうなることか・・・」

「来年か」

「そう、また一年後、鍛えに鍛えて、互いに、この逢瀬を楽しみましようぞ？」

「うむ」

「幸せでございますな」

「幸せか？」

「はい、目標を持って生きるとはなんと充実していることか・・・」

「そうよな」

「あなたの存在が、私の生きるよろこびでございます」

「おう、我もぞ」

・・・このように、

壮絶な果たし合いゆえに、ふたりは、年1回しか逢わないのだが、
そのほほ笑みは、どちらも満ち足りたものであった・・・

(おわり)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3493h/>

七夕物語（雨ふらし風味）。

2010年11月26日06時47分発行